

教祖さま関係事項

年号	西曆	年齢	事項
慶応 四	一八六八	一	七月二十八日、美濃国笠松（現在の岐阜県笠松町）に誕生。九月八日、明治に改元。
明治 一六	一八八三	一六	家運挽回の法を聞くべく、大垣の鈴木キセ先生を訪問。
一九	一八八六	一九	天眼通を得られ、位牌が動物の形に見える。
二四	一八九一	二四	一〇月二十八日、濃尾大地震。
二五	一八九二	二五	名古屋市の日蓮宗本立寺住職、名倉順慶師のもとで法華経を学ばれる。
二八	一八九五	二八	妹と織り子、数名を連れて、愛知県西ノ口村（現在の常滑市）へ移り、晒織業を営む。
三二	一八九九	三二	本立寺で百日の断食行、自己の神通力に確信をもたれる。
三三	一九〇〇	三三	天耳通を得られ、「我は最上位経王大菩薩なり、汝の守護をなす」と天の声を聞かれる。父、定七が死去、享年六三歳。
三四	一九〇一	三四	愛知県阿久比村（現在の阿久比町）で断食、水行をされる。牧静衛・村上斎先生と邂逅。阿久比村臥竜山にて水行、断食、経義の研究に没頭される。
四三	一九一〇	四三	愛知県白川村（現在の藤岡町）で医院を開業。医薬、精神両面による村民の救済に貢献される。
四五	一九一二	四五	「一念三千」の理を悟られる。七月三〇日、大正に改元。
大正 二	一九一三	四六	大戦の勃発を予言（翌年、第一次世界大戦がはじまる）。
三	一九一四	四七	白川村を去り、名古屋市東区清水町に「仏教感化救済会」を設立される。
四	一九一五	四八	名古屋市東区葵町に仏教感化救済会本部を移転。経営難のハンセン病専門病院、東洋病院を援助される。

五	一九二六	四九	東京上野に東京支部を設立。
六	一九二七	五〇	一時、盲目となられる。
七	一九二八	五一	静岡県御殿場の復生病院に出張、ハンセン病患者救済に貢献される。
八	一九一九	五二	流行性感冒が全国で蔓延（スペイン風邪）、東京支部を中心に感冒除難の祈願をされる。
九	一九二〇	五三	予言通り、尼港事件（シベリア、ニコラエフスクで邦人が多数殺害される）が起きる。
一〇	一九二一	五四	二、三年後に東京方面で大震災があることを予言される。
一一	一九二二	五五	名古屋市内の貧困者、八百余名に白米と金品を施与される。
一二	一九二三	五六	九月一日、関東大震災。名古屋駅に救援所を設け、避難民に食料や飲料水、衣服等を送られる。
一三	一九二四	五七	また、小冊子「世界の鏡」を無料配布し精神上的の救済にも努められる。
一四	一九二五	五八	大阪市で妙法流布に勤しまれる。
昭和	一九二七	六〇	阿久比村臥竜山の農場で青少年を訓育。
二	一九二七	六〇	愛知県猪高村藤森（現在の名古屋市）に公堂を建立し、農民の訓育にあたられる。福岡市のハン
三	一九二八	六一	セン治療養所、生ノ松原療養所の運営を支援。
四	一九二九	六二	福岡市において教化講演会を開かれ、広宣流布に勤しまれる。
五	一九三〇	六三	福岡支部（生ノ松原療養所）を建設。五月三十一日、姉、てるが亡くなる。
六	一九三一	六四	伊豆地方震災。罹災民救済のため衣類、食料を持参して現地に赴かれる。
七	一九三二	六五	大仏建立に奔走。 六月二十八日、寂。

あとがき

「人生はちやうど旅の空のようなものです」

教祖杉山辰子先生は、そうおっしゃっています。お言葉どおり、十六歳で信仰の道へ歩み出されてから、さまざまな場所で修行を積まれ、仏教感化救済会の設立後も東京、大阪、福岡など各地へ赴かれており、その御生涯は旅の連続でした。

教祖様にとって、旅とは仏道修行にほかなりません。本書の題名となった「華」とは「法華経」を指し、「法華経行者」の意味をこめて「華の旅人」とつけました。教祖様は一筋に法華経を信仰なさって旅をつづけられました。しかし、当初からまっすぐな道を進まれたのではありません。旅のはじめには、目的地がどこにあるかまったく見通すことができず、前途には深い霧が横たわっていたと思われれます。

私ども（教化局六名）の旅は、笠松からはじまりました。名古屋を車で出発し、新木曾川橋を渡ってすぐ左へ折れると笠松に入ります。ゆるやかに時の流れる静かな町です。最初に向かったのは、教祖様の御聖地でした。物語を作るにあたって、まずは教祖様にご挨拶をしておかなければいけない。そんな思いがあつたからです。教祖様の像に手をあわせ念じました。

「これから、教祖様ゆかりの地を訪ねてみようと思います。しばらくの間、よろしくお願いいたします」

そのときには、どんな物語に仕上がるのかまるで見当もつかない状態でした。たしかに、手元には教祖様の御生涯をまとめた先達の労作があります。しかし、これを読んでただちに物語を作るのは、容易なことではありません。何をどう手をつけていいのか、考えあぐねるばかりでした。かつて、教祖様がそうだったよ

うに、私どもの行く手も霧で閉ざされていたのです。

ともあれ、私どもにできるのは、教祖様にご縁のあった土地へ行ってみることです。お参りをすませたあと、笠松の町を散策し、はじめの予定にはなかったのですが、その足で大垣へ向かいました。教祖様が舟でお行きになった川沿いの道を走って、宝光寺にたどり着いたときには、ほんの少し教祖様のお心に触れることができたような気がしました。日をおいて西ノ口、阿久比、白川へも出かけました。実際にそのような場所を訪れるごとに、教祖様のお姿を感じ、物語の手がかりを得ることができました。行く先々で、教祖様が見守っていてくださったような気がします。そんな気分を、本書を読まれる皆様にも感じ取っていただければ幸いです。

昨年七月、この物語を作るようおおせつかったとき、何の脈絡もなく、「これは先祖を探す旅だ」と感じました。もちろん、私どもは教祖様とはまったく血のつながりはなく、なぜそんなふうにしたのか言葉で表現するのは困難ですが、つまり、こういうことだと思えます。血縁関係にはなくとも、教えの親として教祖様がこの世にお出ましになられたからこそ、私どもは今このように感じる事ができる。お出ましにならなければ、まるつきり異なる道をどのように暮らしていたか思い描くこともできません。直系の先祖が一人でも欠ければこの世に生を享けることがないのと同じく、私どもにとって教祖様はまぎれもなく「御先祖」なのです。

本書ができあがるまでに多くのの方々のご助力、ご助言を賜りました。この場をお借りして厚くお礼申し上げます。

平成十五年晩秋

大乘教教化局

華の旅人

物語 教祖杉山辰子先生の歩まれた道

二〇〇三年一月一六日 初版第一刷発行

監修…杉崎法涌

編纂…大乘教教化局

漫画…本山一城

発行所…大乘教総務庁

〒四五六―〇〇一三

名古屋市熱田区外土居町四―七

電話(〇五二)六七一一六一四六(代表)

<http://www.daijokyo.or.jp>

info@daijokyo.or.jp

印刷所…三美印刷株式会社

編集制作…鈴木出版株式会社

協力…すずき出版名古屋販売株式会社

華の旅

はな

人

